

<前回：オリエンテーション+導入=前期のまとめ>

#### A. テーマ：キリスト教思想研究入門B

「現代キリスト教思想史——1960年代から現在」

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教講義A・B」を受講し、キリスト教思想研究に関心のある学部生、あるいはキリスト教研究の基礎の習得をめざす大学院生を対象に行われる。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

<導入：前期・特殊講義2aより>

### 弁証法神学の意義 (1920年代～1960年代)

1. ティリッヒ『現在の宗教的状况』(一九二六年)の序論冒頭
2. 現代神学にその歴史的な文脈の確認からアプローチする理由。「現在」は過去から未来へ動く現実=プロセスの中にある。
  - ・現代神学の「現代」：1920年代～2010年代
    - ・現代神学1(前半)：1920年代～60年代→前期講義
    - ・現代神学2(後半)：1970年代～現在→後期講義
3. 弁証法神学の位置づけ。現代神学の開始(近代神学の展開としての自由主義神学に対して)、1960年代までの神学的思惟を規定。1970年代以降は弁証法神学以後の時代。
4. 近代：
  - ・18世紀の啓蒙思想前後に明確な形態を獲得し、19世紀を通じて西欧社会に確固たる地位を確立し、その後世界的に広がった社会システム(科学技術、民主主義、資本主義などのサブシステムを包括する)によって規定された時代区分(トレルチの新プロテスタンティズム)
  - ・近代とは近代化プロセスにおいて生成するシステムである。→西欧社会に世俗化と文化変容、近代合理主義(啓蒙的な実証主義的科学→自然主義と歴史主義)、民族主義、階級対立。↓
  - 近代キリスト教の最大の課題：この近代的な状況にいかに対処するか。
  - 近代への積極的適合から反近代的抵抗までの幅。
  - ・キリスト教が近代に適応するための学問的基礎としての近代神学。
  - 弁証法神学の批判対象。シュライアマハー、リッチェルからトレルチにいたる自由主義神学と呼ばれる神学動向。
5. 自由主義神学に代表される近代神学の基本性格。
  - ・アンソニー・ギデنز：近代は制度的再帰性。
  - 懐疑と基礎づけ主義、啓蒙主義的な実証主義的科学(ニュートンの近代自然科学)。
  - ↓
  - 近代聖書学の方法論(歴史学と文献学)、神学体系(組織神学)の構想。
6. 近代的知の制度。大学・学会・出版。特に、学会と出版は近代的。大学も近代的な研究大学。
7. 啓蒙主義以前のキリスト教的知にとって中心的であった教会や教派が周辺化。
8. 弁証法神学運動：神学思想史は、ここに「現在」の始まりを見ることができる。
10. 1920年代のドイツ。
  - ・西欧近代の危機は、19世紀末頃には学的世界全体に広がっていた。第一次世界大戦と革命という危機とシュペングラー(『西欧の没落』)やA・シュヴァイツァー(『文化の頹

廃と再建』)などの文明論。相対性理論と量子力学の衝撃。

↓

1920年代のドイツにおいては、広範な学問への問い直し。方法論的客観性を理想とする19世紀的な近代的学問への批判、非合理的な生の現実(全体性)に適応し得る学問の探究。

11. 現代神学の出発点としての弁証法神学。

認識主観による知識の構成を基盤にしていた近代的学問(カント主義から構成主義まで)から、認識主観(人間)に対する神学的知の対象の優位の主張へ。

神学の対象としての神の言葉、あるいは啓示にふさわしい認識方法の探求であり——人間の主観に啓示が合わせるのではなく、人間の主観が啓示に合わせる——。

12. カール・バルト。トーマス・F・トランスのバルト解釈(『科学としての神学の基礎』教文館)。

・バルトによる神学的知における神の主権の再発見=密かに人間学へ変質した近代神学を乗り越える試み。アンセルムス研究における神学の方法論(知解を求める信仰)の確立、キリスト論的集中→『教会教義学』。

・三位一体論と神学体系との関係。

・『教会教義学』: 厳密には弁証法神学から区別されるべき。

15. 神学的知にとっての教会の意義の再発見。ボンヘッファー。

16. 現代神学は近代の克服の試みであるが、いまだ近代は継続中である。

近代は近代の変容を含む。近代批判を自らの構成要素として組み込む過程。

17. 弁証法神学において、なおも存在する近代神学の問題状況。ブルトマン。

・近代的科学的な世界観と信仰の関係。進化論と創造論の関わり。

・非神話化・実存論的解釈(神学論集『信仰と理解』など)。現代においてキリスト教信仰はいかなる仕方でもなおも有意味であり得るのかという神学者ブルトマンの問題意識。

それに対するブルトマンの回答は、聖書の「より深い意味の再発見」のためには聖書の「神話論的諸表象は棄ててもよい」ということであった(たとえば、「イエス・キリストと神話論」1958年、など)。

18. 弁証法神学運動の解体。相互の食い違いの顕在化。バルトとブルトマンもその一例、バルトとブルンナー(自然神学論争)やゴーガルテン(ナチズムとの関わり)との間。

19. ティリッヒの位置。聖書の神話論的表象について、バルトとブルトマンの中間に位置しており(厳密にはブルトマン寄り。「非字義化」)、また自由主義神学と弁証法神学とに関しても、その中間の道を目指している。ティリッヒは弁証法神学の周辺に位置づけることができる。

21. 弁証法神学の真理性を自由主義神学の遺産に接続。三巻本で刊行された『組織神学』の方法論である、「相関の方法」。

・相関の方法: 問い(状況に内在する)と答え(伝承されたメッセージが与える)を相関させることによって、時々の時代状況とキリスト教的伝統との呼応関係に基づいて神学体系の構築を目指す。

22. 弁証法神学運動が、現代神学、特にその前半(一九六〇年代)を決定的に規定していたこと。モルトマンの自伝(ユルゲン・モルトマン『わが足を広きところに——モルトマン自伝』新教出版社)から。

23. 人文学におけるパラダイム概念の可否。

・ハンス・キュンクのバルト評価。

## 1. 現代神学の問題状況—1970年代以降

### 1. 1980年代以降のキリスト教思想の動向：宗教的多元性と科学技術

「現代キリスト教思想は多岐にわたっており一見混沌とした様相を呈しているものの、この動向（特に1980年代以降）を詳細に分析するとき、次の二つの中心問題を確認することができる。

1. キリスト教と科学技術（自然科学が担う近代的合理性と技術的革新）との関わり
2. 多元的社会におけるキリスト教の課題・意義（公正・正義に対するキリスト教の寄与）

現代のキリスト教思想をリードする思想家たちは、それぞれの思想的立場は異なるにもかかわらず、ほとんど例外なく、これらの問題を意識しつつ思索を進めている。これら二つの問題は相互に無関係に位置づけ得るものではなく、むしろ緊密な結びつきにおいて考察されねばならないことが、国内と海外を問わず、研究者の共通認識となりつつある。現代の科学技術の問題が社会的正義の問いと無関係であり得ないことは、環境と経済が分離不可能な問題群を構成していることから、明らかである。

特に、3・11の東日本大震災と原発事故以来、原子力発電に象徴される科学技術の問題状況は、それまでのキリスト教思想の楽観的な論調に大きな修正を迫っている。また、リーマン・ショック以来、キリスト教思想にとって、経済はこれまで以上に重大なテーマと意識されている。」(科研申請書から。http://agape009.blog.fc2.com/)

2. 森田雄三郎「現代神学の動向」(1987年)、森田雄三郎『現代神学はどこへ行くか』(教文館、2005年)

「今日、欧米を訪れるとき、その地の神学的雰囲気、かつての弁証法神学全盛の時代とは大きく変化していることを、だれしも実感するであろう。しかも、その新しい雰囲気の中で中心となる本質的なものは、まだ必ずしも定かではない。バルトやブルトマン、あるいはティリッヒやニーバーといったいわゆる大物が存在せず、まさに神学の戦国時代に突入した感がある」、「このような動向が表面化しはじめたのは六〇年代半ばであった。この新しい動向の深まりと激化は、さまざまな神学的主張と教会批判の実践とともに進展したが、その本質はいったい何であったのか。一九六五年から今日まで既に二二年が経過している。この一世代に近い年数の間に、新しい動向はそれぞれの立場の自己主張に学問的な自己検討を加え、神学的方法論をも明確に反省してきたので、新しい動向を漸く全体として総覧できる時期が来たと言えよう。」(32-33)

解釈学としての神学／歴史の神学（宗教学・宗教史の神学、科学論の神学）／希望の神学・革新の神学（解放の神学）／プロセス神学

### 3. 1960～70年代：弁証法神学の担い手の逝去

バルト(-1968)、ブルトマン(-1976)、ティリッヒ(-1965)、ブルンナー(-1966)、  
ゴーガルテン(-1967)、R・ニーバー(-1971)、H・R・ニーバー(-1962)

### 4. 新しい問題の顕在化：

1970年代以降（アメリカでは1960年代から、日本では1980年代から）、生命倫理と環境倫理がキリスト教思想でも重要なテーマとして意識されるようになる。

→ 科学技術の問題の再テーマ化（対立・分離を経て）。

宗教的多元性が神学的問い（宗教の神学）としてテーマ化。

5. これらの諸テーマを議論する枠組みの不在。それぞれの視点、文脈から、理論的かつ実践的な多様な試みが並行して発生した＝混沌。

この思想状況の基調は現在も継続中＝現代神学2

・背後にある現代世界の激動

1970 年前後：1968 年・学生の反乱、1971 年・金ドル交換停止（ブレトンウッズ体制の終焉）

1990 年代：東西冷戦の終結と新自由主義の台頭

21 世紀：アラブの春以降、リーマンショック

↓

「グローバル化／多元化」という状況

- ・新自由主義に象徴される新しい資本主義（知識資本主義）
- ・「帝国」とは何か。国民国家の相対化・覇権の多元化の中で。

「グローバル化／多元化」の中で何が生じているか。グローバル化は多元化を促進する。

- ・危機＝問題の共有・相互連関
- ・議論の場の多元化

生命／環境、経済、リスク

- ・情報が基本的カテゴリーとして登場

情報としての生命、貨幣の電子化（物としての貨幣の終焉？）、

情報・資本主義

- ・政治（国民国家）と経済（グローバル市場）の新しい連結の模索

いよいよ現実のものとして顕在化する。国民国家の危機は、真のポスト近代の幕開けか

↓

この状況で、キリスト教、神学は、どこに立つのか。国際化？ どのような国際化？

6. 栗林輝夫『現代神学の最前線——「バルト以後」の半世紀を読む』新教出版社、2004年（『福音と世界』2002-2004年）。

「実はプロテスタントの神学はこの五十年ほどの間に、ほぼ二回のパラダイム・シフトをした。ひとつは六〇年代末の大きな転換、もうひとつは八〇年代の、それよりはやや緩やかなシフトである。」(13)

「バルトの教義システム」「神ならぬものを神とする現代の偶像崇拜に抗して、教会を真に教会たらしめる最強の論理になる」、「だがそれだけでいいのか。この問いを前にして、世界が大きく揺らいだ六〇年代半ば、キリスト教プロテスタントイズムは新正統主義とは別に、新しい潮流の数々を醸成することで、激動の時代に応えることになった。」(19)

「欧米で新正統主義に深刻な翳りもたらした一つは、人々がもはや教会はおろか宗教にも関心を抱かなくなる、という「世俗化」の問題だった。」(19-20)

ロビンソン『神への誠実』、コックス『世俗都市』

「解放の神学は既成のキリスト教に挑戦し、教会制度と宣教問題、教義学上の神や霊性の理解、歴史における個人の社会的役割、政治経済的な倫理等々、あらゆる次元で果敢な脱構築を試みた。七〇年代から八〇年代、「解放」と「連帯」は、それに賛成する／しないにせよ、現代神学の最大級の争点、無視することができぬキーワードになっていたのである。」(22)

「だが現在、神学は多元化した。階級や文化、性のちがいはもちろん、地理的にもヨーロッパからアメリカ、アメリカからアジア、アフリカへと、神学のセンターを移動させつつ複数発信されるようになった」、「東アジアのコンテクスト」(24-25)

7. 「ポスト・・・」の時代

- ・ポストモダン、ポストリベラル、ポスト世俗化時代などなど。

多様・多層・多形的な変化が生じている、これは神学にも反映している。

- ・この変化は何か。
- ・「ポストモダン」の場合。

It is impossible to explore any aspect of modern western culture without coming to terms with what has often been termed "the postmodern shift". Although the origins of this trend can be traced back at least to the early 1970s, its full impact would not be felt until the late 1980s. Postmodernism is generally taken to be something of a cultural sensibility without absolutes, fixed certainties or foundations, which takes delight in pluralism and divergence, and which aims to think through the radical "situatedness" of all human thought. (Alister E. McGrath, *The Foundation of Dialogue in Science & Religion*, Blackwell, 1998, pp.9-10.)

「この研究が対象とするのは、高度に発展した先進社会における知の現在の状況である。われわれはそれを《ポスト・モダン》と呼ぶことにする。この用語は、現在、アメリカ大陸の社会学者や批評家たちによって広く用いられている。それは、十九世紀末からはじまって、科学や文学、芸術のゲーム規則に大幅な変更を迫った一連の変化を経た後の文化の状態を指して言われている。ここでは、われわれは、こうした一連の変化を、物語の危機との関連において位置付けたいと思う」(ジャン=フランソワ・リオタール『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』風の薔薇、1986年、7頁)、「極度の単純化を懼れずに言えば、《ポスト・モダン》とは、まずなによりも、こうしたメタ物語に対する不信感だと言えるだろう」(8-9)。

#### 8. 体系的思惟の彼方へ、しかし、神学固有の思惟は具体化されたのか？

体系的思惟の後退、組織神学の危機？

議論の各論化、知の分散化

「近代」からの離脱、教派的アイデンティティの変化・希薄化

確かに、近代においてなおも重要性を有していた、教派的多元性は、急速に後退。

この動向は、近代からいわゆるポストモダンを通じて継続されている。

エキュメニズムの成果、1930年代にティリッヒは予言していた事態

ポストプロテスタント時代

「プロテスタント時代の終焉？」1937年

(著作集・第五巻、白水社)

↓

#### 9. 新しい争点・対立軸の形成＝「何が問題か」をめぐる

・栗林：「解放の神学は既成のキリスト教に挑戦し、教会制度と宣教問題、教義学上の神や霊性の理解、歴史における個人の社会的役割、政治経済的な倫理等々、あらゆる次元で果敢な脱構築を試みた。七〇年代から八〇年代、「解放」と「連帯」は、それに賛成する／しないにせよ、現代神学の最大級の争点、無視することができぬキーワードになっていたのである。」(22)

- ・争点＝対立軸の変化、教派的な相違から、性、開発、環境、生命・・・

#### What Is Christianity?

Normally, the Christian community understands the Jesus-event as located in the history of Israel and find much of normative importance in that earlier history. . . . Normally, it places great weight on the written records of Israel's life and of the Jesus-event, that is, on the Bible. Much else can be said of its usual practice. But a definition should include only enough to establish boundaries within which there may still be great diversity. No matter how carefully those

boundaries are drawn, furthermore, there will be many borderline instances. This does not disqualify a definition.

Beliefs are important to this sociohistorical movement. Subgroups within the community may not be able to work together if they disagree too much on the meaning of the founding events. Today it is hard to understand the intensity of the feeling aroused by disagreements on Christology and Trinity in the early church because these differences are not the ones that divide us today. . . .

More understandable to us are the theological quarrels that gave rise to the Reformation. But they, too, are fading in importance. Lutherans and Catholics can now agree on common formulations without overcoming their practical differences, brought about by a long history of separate development.

In the nineteenth century, denominations split over slavery, an issue we can still understand. Today the most divisive issues among Christians in the United States are abortion, women's ordination, and homosexuality. To what extent these will cause institutional decisions within the church remains to be seen, but they are already dividing the Christian movement. (John B. Cobb, *Postmodernism and Public Policy. Reframing Religion, Culture, Education, Sexuality, Class, Race, Politics, and the Economy*, State University of New York Press, p.17)

10. グローバル化／多元化において、未解決のままにされていた問題が新たな回答を求めて動き出す。危機はチャンスでもある（現代のカイロス）。

・キリスト教の普遍性とは何か。普遍性と「大きな物語」。

具体的普遍性 ↔ 一般化された抽象的な普遍性

ジジエク

普遍性は、所有や独占の事柄ではない

11. 21世紀に入って、モダンはさらに揺らぐ。

・リーマンショック（2008年）、アラブの春以降の政治的流動化（2010-2011年）、福島原発事故（2011年）など

キリスト教神学は、経済、政治、科学技術に関連して、20世紀にはなかった、あるいは顕在化していなかった新たな問題状況に直面している。